

113. Radioimmunoassay による α -fetoprotein の測定

——特に臨床的意義について——

県立がんセンター新潟病院 内科

筒井 一哉 原 義雄
放射線科 渡辺 清次

われわれは α -fetoprotein を Radioimmunoassay (2 抗体法) で測定し、その臨床的意義について検討した。

RIA 法による α -F の測定可能領域は 5~1000ng/ml であった。正常成人82名測定し全例 15ng/ml 以下であった。

妊婦は高値を呈し、8ヶ月まで漸増し、産後2ヶ月で正常域に復した。正常乳児でも4ヶ月未満で高値を示すものがあるが5ヶ月以降は全例正常域にあった。又、乳児肝炎は全例異常高値を呈した。

ヘパトームでは M.O. 法、S.R.I.D. 法で α -F 陽性例9例は全例 1000ng/ml 以上で、 α -F 陰性例8例中5例が高値を示した。Edmondson 分類Ⅳ型の3例が正常域にあった。

胃癌42例中5例が高値を示した。その他の悪性腫瘍では embryonal coll carcinoma の1例が高値を示した。他すべて正常域にあった。

急性肝炎では発黄型の3例は高値を示し、無黄疸の2例は正常域にあった。慢性肝炎では活動型2例は非活動型2例より高値を示した。肝硬変の4例中長与の乙型の1例が高値を示した。

肝機能と α -F との関係は急性肝炎に関してのみ総ビリルビンとよく相関した。GPT とは発黄型急性肝炎と慢性肝炎についてある程度相関した。

以上 RIA 法で α -F が高値を示す例はヘパトーム以外でもいろいろあり、1回の測定値のみでは鑑別不可能である。同一症例について経時的変動をみると、ヘパトームでは肝切除例、制癌剤動注例で一時的下降を示すがその他は上昇の一途をたどった。その他の肝疾患では急性肝炎、乳児肝炎は漸減し、慢性肝炎、肝硬変は肝機能や一般状態と一致し変動した。

α -F は同一症例でも時々刻々と変動しており、経時的追跡がぜひ必要である。これによりいわゆる α -F 偽陽性例もヘパトームとの鑑別が可能と考える。

114. α -Fetoprotein 測定例の肝癌のシンチグラムについて 第1報

大阪赤十字病院 内科

笠原 明 大西 三郎 但馬 浩
中島 健一 清水 達夫 池原 幸辰
二本杉 俊 浦野 俊子 長谷川啓子

われわれは、過去1年間に198例の肝疾患に血清中 α -Fetoprotein (AFP) を測定 (single radial immunoassay および、一部 radioimmunoassay) して来た。臨床診断が原発性肝癌37例——組織所見の明らかなものは15例——、転移性肝癌24例——組織所見明らかなものは12例——の中で AFP 陽性原発性肝癌は19例であり、転移性肝癌は全例陰性であった。肝シンチグラム—— ^{198}Au -colloid 200 μCi 投与——のある原発性肝癌15例、および転移性肝癌12例につき、肝シンチグラム——正面像、右側面像上の所見を綜括した。